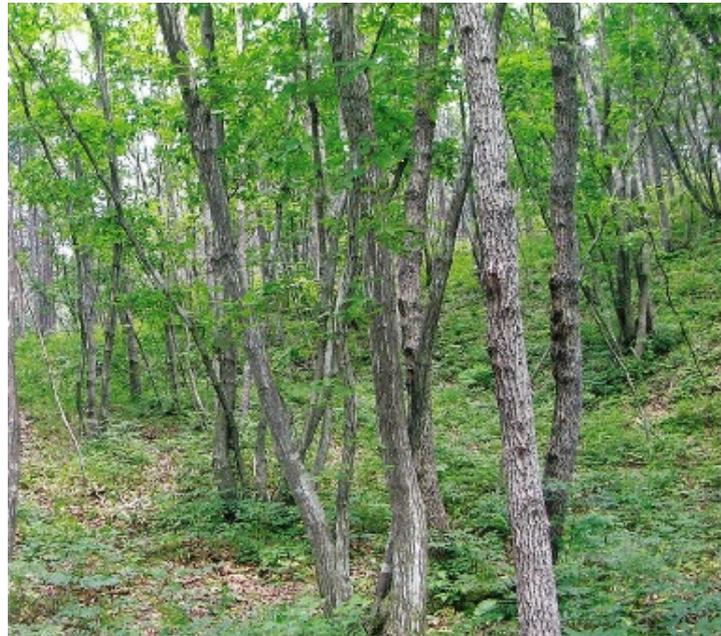


里山広葉樹の利活用と再生に向けて

～里山広葉樹利活用推進会議の提言の概要～



2025年4月

国産広葉樹利活用推進チーム

里山広葉樹利活用推進会議の設置

- 林野庁では、里山広葉樹の利活用を通じた再生の方策について検討するため、昨年11月に、森林・林業関係者や家具・薪炭などの業界の方々、消費行動に詳しい立場の方々など幅広い層の方々の参画による『里山広葉樹利活用推進会議』を設置し、昨年度末に提言をとりまとめ。
- この利活用推進会議の議論に向けて、林野庁内でどんぐり好きを募り、『国産広葉樹利活用推進チーム』を組織し(22名)、調査や資料の作成等を実施。

○ 里山広葉樹利活用推進会議 委員

2025年3月時点

氏名	所属
青井 秀樹	(国研)森林総合研究所 林業経営・政策研究領域チーム長
海堀 哲也	朝日ウッドテック株式会社 代表取締役社長
加藤 洋	カリモク家具株式会社 取締役副社長
末吉 里花	一般社団法人エシカル協会 代表理事
鈴木 信哉	ノースジャパン素材流通協同組合 理事長
土屋 俊幸	公益財団法人 日本自然保護協会 理事長
都竹 淳也	飛騨市長
長野 麻子	株式会社モリアゲ 代表
西野 文貴	株式会社グリーンエルム 代表取締役社長
廣瀬 直之	東京燃料林産株式会社 代表取締役
盛 孝雄	ひだか南森林組合 組合長付専務
森松 亮	富山県西部森林組合 代表理事組合長

1 里山広葉樹林の現状①

- 我が国の森林総蓄積56億 m^3 のうち、広葉樹は16億 m^3 で約3割。
- 里山広葉樹林はかつて地域住民に利用されてきたが、燃料革命等により利用されなくなり、高齢化・大径化が進行。こうした放置里山林は約400万haあると推計。

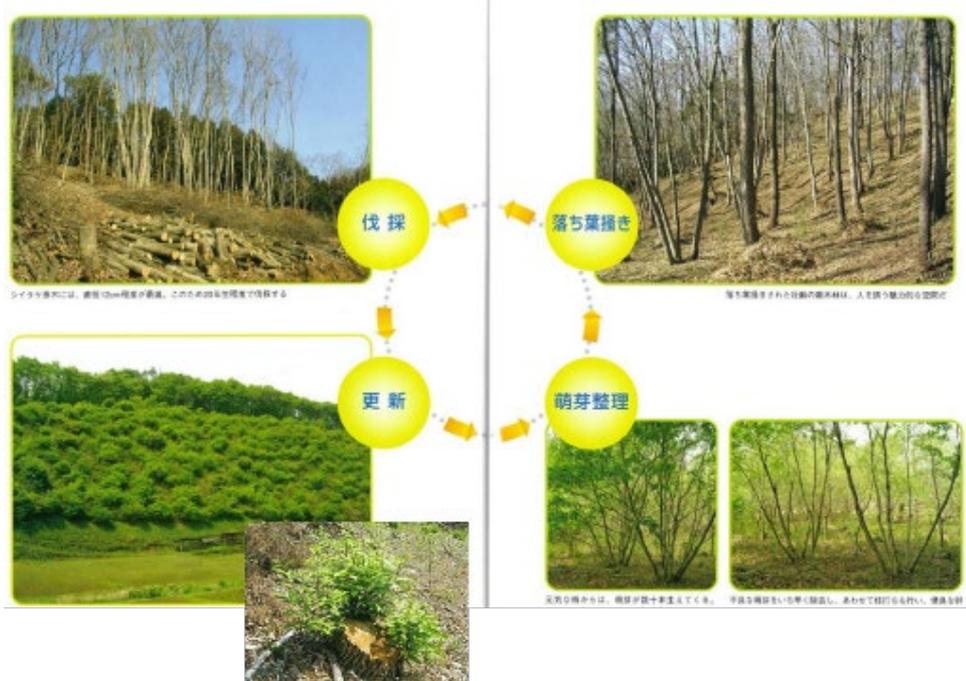
里山林とは

- 里山林は、地域住民の生活必需品であった燃料、農具などの生活に必要な資材、農業肥料用の落ち葉など、日々の暮らし・生業と密接に結びついて形成された森林。



かつての里山林の施業イメージ

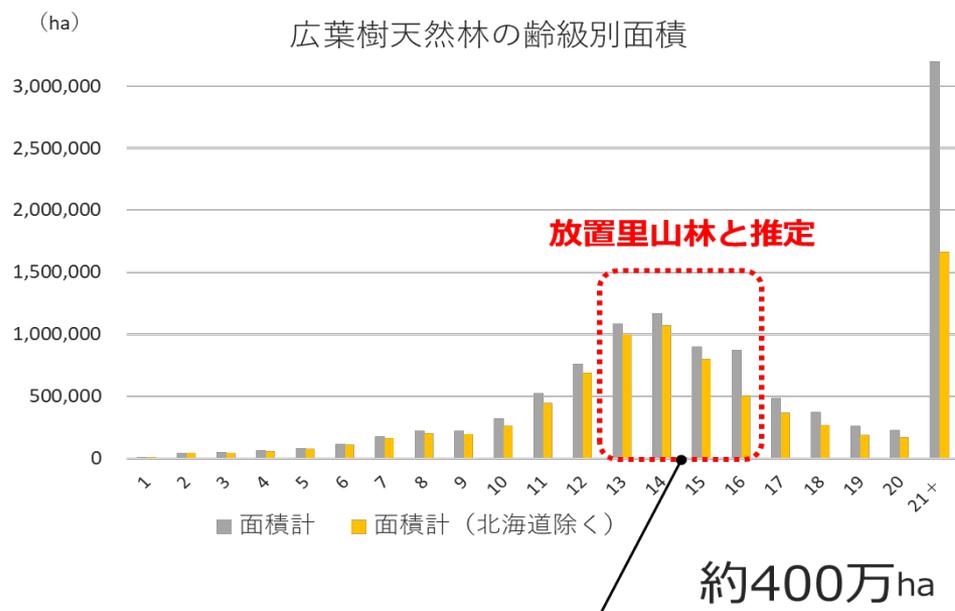
- コナラやクヌギなど、人の手により育成された広葉樹林が中心で、20年程度のサイクルで「伐採→萌芽による再生→成長→伐採」のサイクルで利用され、独自の生態系を形成。



1 里山広葉樹林の現状②

- 里山広葉樹林の放置は、「ナラ枯れ被害の拡大」、「野生動物との軋轢の増加」、「竹林の侵入拡大」など、人々の暮らしや生態系へ様々な悪影響。
- これは、日本の生物多様性の危機のうち第2の危機といわれるアンダーユースによる危機。

放置里山林の面積の推計



昭和35（1960）年以降伐採されていない広葉樹天然林（61年生以上～80年生（13～16齢級））

出典：林野庁「森林資源の現況（令和4年3月31日現在）」

ナラ枯れ被害の拡大

- 里山林の放置によりナラ枯れを媒介するカシノナガキクイムシの繁殖に適した大径木が増え、被害が拡大し、風致や防災等の公益的機能が低下する懸念。



野生動物との軋轢の増加

- 里山林における人間活動の低下や大径木の増加は、サル、シカ、イノシシ、クマ類等の分布の拡大、生息数の増加等につながり、農業被害といった人との軋轢が増加。

2 広葉樹の需要動向

- 我が国の広葉樹需要量は全体で少なくとも年間約2,400万m³で、このうち国産材の供給は約250万m³と1割程度
- 輸入広葉樹の製品用途は20%以上であるのに対し、国産広葉樹の製品用途は5%以下と僅かであり、国産広葉樹は量的にも質的にも有効に活用されているとは言い難い現状

日本の広葉樹の需要量 ※原木換算値

国産広葉樹材 2,465千m³

輸入広葉樹材 21,418千m³

木炭, 1,018 製材・加工材, 398

木材チップ, 15,914 合板, 2,175 単板, 1,838

広葉樹の総需要量
23,883千m³

■ 木材チップ ■ 薪材 ■ 木炭 ■ 丸太 ■ 製材・加工材 ■ 合板 ■ 単板

資料:財務省「貿易統計」より林野庁作成

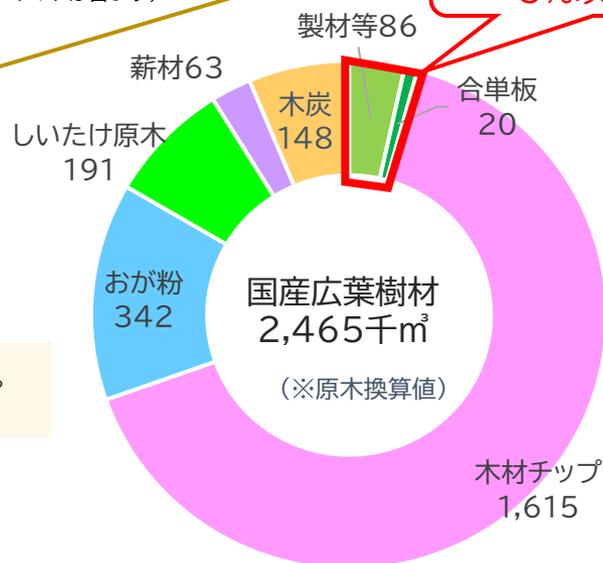
注1:輸入量は、「木材需給表」の丸太換算率を使用して算出
注2:貿易統計について「針葉樹以外のもの」を抜粋(パレットは含まず)

輸入広葉樹の製品用途
20%以上

国産広葉樹の製品用途
5%以下と僅か

このうち国産広葉樹の需要先内訳 (令和5年)

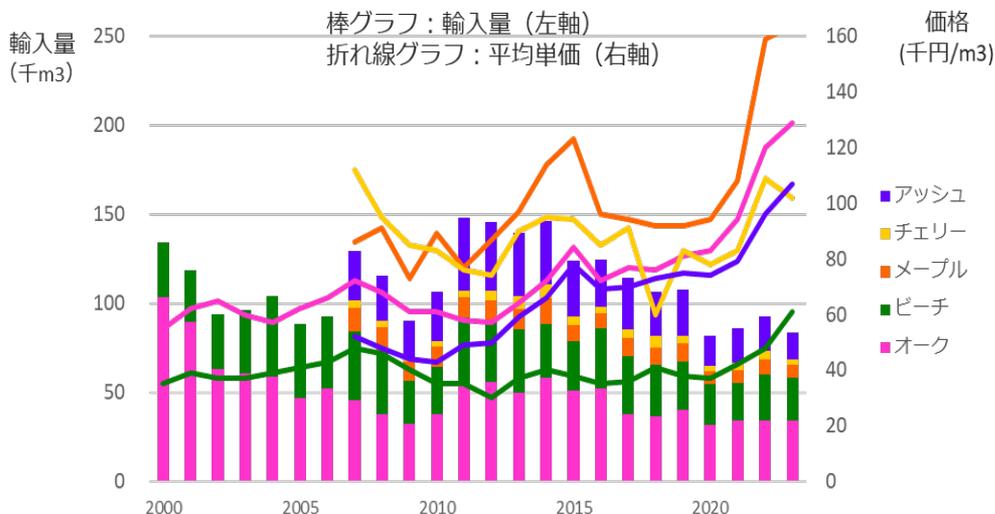
需要の7割を占めているのは主に製紙用のチップ



3 広葉樹利用の新たな動き

- 近年、輸入広葉樹は価格が急騰しており、家具製造等の業界から国産広葉樹への供給ニーズが高まっている。
- その際、国内の広葉樹林の資源内容や近年のエシカル消費への意識の高まり等を背景に、従来の樹材種だけでなく、これまで未利用だった虫害被害木も含め、積極的に里山広葉樹材を利用する動きも見られるところ

主要輸入広葉樹(製材品)の輸入量、平均単価



※2007年に輸入の品目分類の変更があり、メープル・チェリー・アッシュが追加
資料：財務省「貿易統計」より林野庁作成

国産広葉樹の利用事例



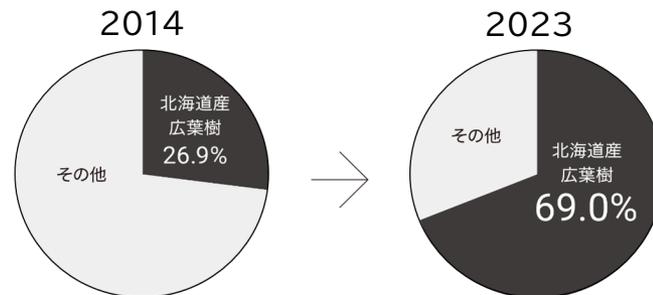
小径木や端材等を利用した家具
(旭川家具工業協同組合)
(写真：(株)カンディハウスHP)



ナラ枯れ材を利用したスツール
(アパレルブランド“ファクトリエ”と
カリモク家具(株)のコラボ商品)
(写真：ファクトリエHP)

国産広葉樹への転換事例【旭川家具】

道産広葉樹の利用率が、10年間で3割から7割に上昇。



資料：旭川家具工業協同組合ウェブサイト

4 国産広葉樹利活用と再生に向けた取組(岐阜県飛騨市の事例)

■ これまで活用されてこなかった里山広葉樹を地域の重要な資源として捉え、地域の川上から川下までの関係者の連携により、途切れていた広葉樹のサプライチェーンを再構築しようとする取組みが行われている。

現状と課題

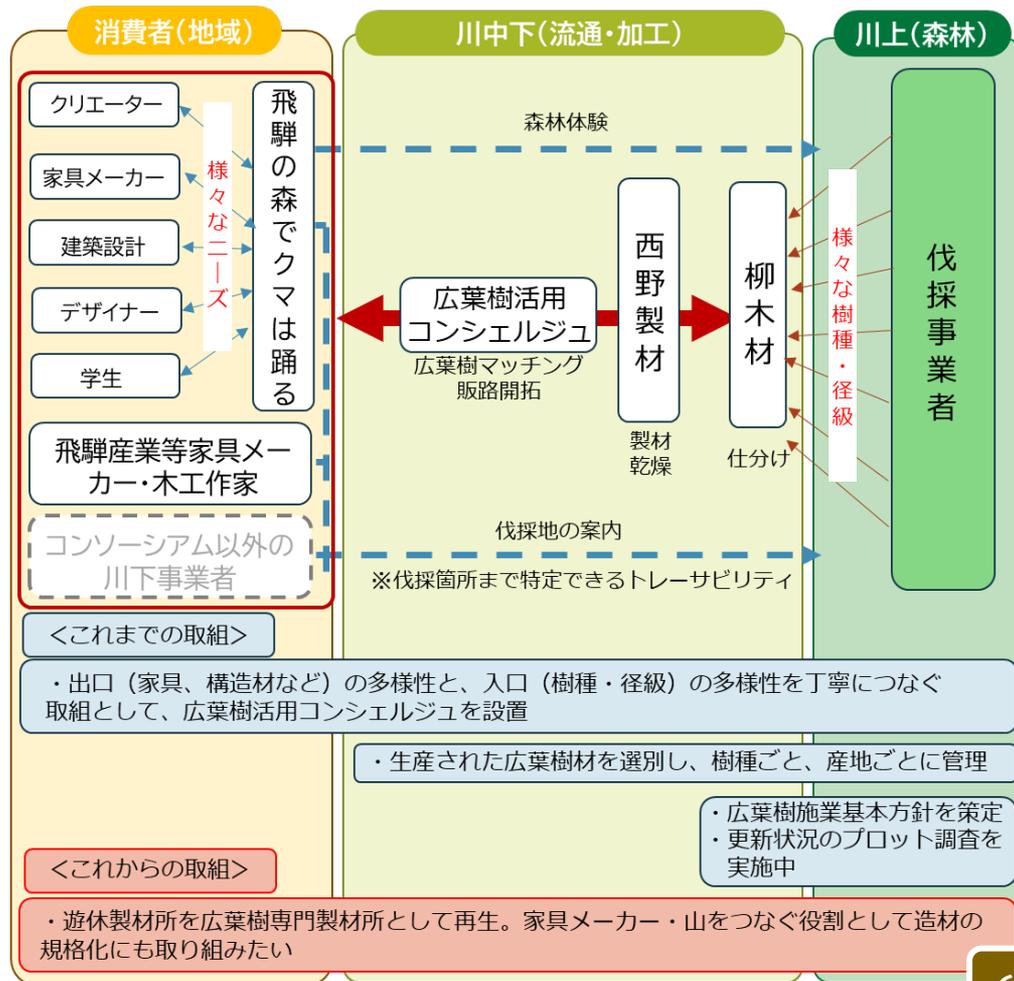
- 飛騨市はミズナラやブナに代表される豊富な広葉樹資源を有する一方、市内で伐採される広葉樹のうち94%がチップ用として安価に市外へ流出。
- 地域の広葉樹に新しい価値を生み出す必要。

対応方向

- 飛騨市は広葉樹のサプライチェーン構築のため、川上から川下の事業者と行政からなる「飛騨市広葉樹活用推進コンソーシアム」を立ち上げ。
- 広葉樹活用コンシェルジュを配置し、流通拠点にある広葉樹原木と家具メーカー等の作り手をマッチングさせ、販路開拓に取り組むなど、広葉樹の新たな価値創造を実現。



飛騨市広葉樹活用コンソーシアム



5 里山広葉樹の新たな価値創造と利活用を通じた再生に向けて

～里山広葉樹利活用推進会議の提言～

- 里山広葉樹林は、かつての地域住民の利用が衰退した結果、現在は放置され樹木の大径化や植生の劣化が進み、それによる国民の暮らしや生態系への悪影響が危惧されている。一方で、国内の広葉樹資源を求める動きが活発化していることから、現在地域の点にとどまっている取組を効果的なサプライチェーンにまで引き上げることができれば、広葉樹の利活用を通じた里山広葉樹林の再生が可能と考えられる。
- 「里山広葉樹利活用推進会議」においては、里山広葉樹林の再生が生み出す『新たな価値』として以下の4点を提示するとともに、『展開すべき施策』として以下を提言。

里山広葉樹林の再生が生み出す新たな価値

① 国民目線から ～ 生物多様性の回復～

我が国が直面している生物多様性の危機の一つである「アンダーユースによる危機」を脱し、生物多様性の回復に資する。

② 地球市民として ～ 地球環境の保全～

輸入広葉樹を国産に置き換えていくことによる海外の森林生態系の保全や、輸送距離の短縮によるCO₂排出量の削減に貢献

③ 地域住民目線で ～ 地方創生～

里山広葉樹は地域で多様性をもつことから、その再生に取り組むことは、例えば小規模製材工場の再生など、地域の産業の結びつきを取り戻すことにつながる。

④ 林業・木材産業の視点から ～ 産業の持続性の向上～

- ・針葉樹供給以外の道が開けることによる素材生産の多角化(川上)
- ・輸入広葉樹材から国産広葉樹材への切り替えによる為替変動リスクの低減(川中)
- ・持続可能性を求める消費者の意向にかなう商品を提供することによる経営の持続性向上(川上・川中・川下)

① 各地域の取組への支援の強化

地域性があることや少量多品種であるといった里山広葉樹の特徴を踏まえた支援メニューの充実・強化
(例)

- 川上:実生更新のための伐採前の刈り払い、機械化を含めた効率的な作業システム構築等への支援
- 川中:地域資源を活用した商品開発や販売促進、小規模遊休工場の再生等への支援 など

② 里山広葉樹利活用・再生プラットフォーム(仮称)の構築

～「森の彩りを暮らしへ」～

森林側がマーケットに積極的にアプローチすることで、需要側のニーズの発掘と里山林への理解を促進し、最終的には伐採地から生産される少量・多樹種の広葉樹材全てを利活用(プロダクトアウト)できるようにするため、基盤となる情報を共有する場としてプラットフォームを設立する。

(ア)参加者のイメージ

- (i)里山広葉樹林の計画的な伐採・再生に取り組む団体(地方公共団体、森林組合、林業経営者、素材生産事業者等)
- (ii)広葉樹材を利用する者(建築・内装材・家具・フローリング・楽器・伝統工芸製造業、きのこ生産者・種菌メーカー、薪炭製造業等)
- (iii)上記の趣旨に賛同する者(生物多様性保全への貢献等に関心のある民間企業・消費者団体等)

(イ)取組事項

○すぐに取り組むべきこと

- (i)里山広葉樹の立木伐採予定情報、原木の市況情報や流通している材の品質等の共有
- (ii)家具メーカーや材木店、きのこ生産者等が欲している木材情報等の共有
- (iii)供給側と需要側の交流とビジネスマッチングとコーディネーターの育成
- (iv)(i)～(iii)を円滑に進めるために必要な情報共有や流通拠点のあり方の検討
- (v)里山広葉樹材の利活用の意義等の情報発信

○発足後 2～3 年先から取り組むべきこと

当面、上記に取り組みつつ準備検討を重ね、数年後に以下に取り組む。

- (i)建築家やデザイナー等の需要者からの相談の受付
- (ii)広葉樹材の伐採・造材・仕分けや、加工・流通、里山広葉樹林の管理等に関する人材育成や相互研鑽
- (iii)広葉樹林の管理や利用によるインパクト評価の検討